

城下町延岡における能楽

能楽のはじまり

「能楽」という語は、明治期に造られた新しい言葉で、古くは「猿楽」と呼ばれていました。「猿楽」は、平安時代に生まれた、物真似・曲芸・歌舞・寸劇など、滑稽を本質とした雑芸の名称で、鎌倉時代後期頃から、能と狂言という演劇に発展し、現在まで伝えられています。

延岡における「猿楽」の始まりは、後世に記された資料であり、信憑性はあまり高くありませんが、『延陵世鑑』では、文保元年(1317)としています。会場は、有馬城下屋敷付絵図にも見ることのできる、恒富村田中薬師(現在の西小学校付近)で開催されていたようで、ここでは、現在、狂言において上演されているような、笑劇が行われていたことが記されています。

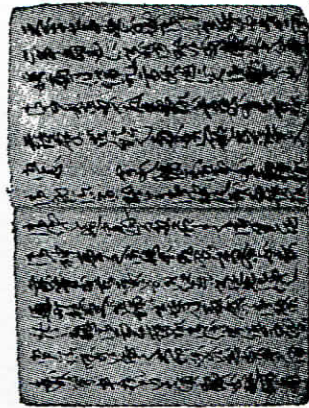
【展示文献資料】

1. 曾根宏子氏所蔵 『延陵世鑑』
2. 宮崎県総合博物館所蔵 『日向延岡伝書』(資料番号 87)
3. 宮崎県総合博物館所蔵 『延岡旧記諸集』(資料番号 1081)

高橋家と能楽

天正15年(1587)、豊臣秀吉は九州の諸大名への領地の再配分を行いました。この時、豊前国香春(福岡県)から縣(延岡)に移ってきたのが高橋元種です。元種は、延岡城を築城し、城下町の整備を進めるとともに、今山八幡宮における神事能を始めたと様々な記録類に記されています。

これ以降、10月15日に行われることになった神事能ですが、神事能を始めるにあたり元種は、能装束をはじめとする能道具を揃え、城下町に預けていたようです。また、元種入封以前より延岡に伝えられていた翁面の打ち直しを、角坊(天下一

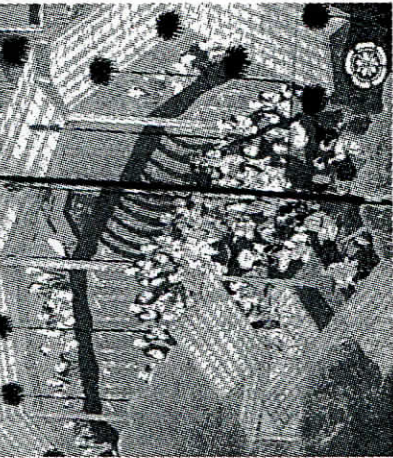


若狭守)に依頼したところ、角坊はあえて打ち直しをせず、修復だけをして元種に戻したと、『日向延岡伝書』に記されています。

有馬家と能楽

慶長19年(1614)、高橋家の改易に伴い、肥前国日野江(長崎県)より移ってきたのが有馬家です。直純・康純・清純と3代続いた有馬家は、延岡城を中心とする城下町の整備を進め、「延岡」という語句の初見資料となる、「城山の鐘」の鑄造も行っています。

また有馬家は、高橋家時代に始まった今山八幡宮での神事能の他に、太神宮(現在の安賀多神社)での神事能を3月16日に始め、これ以降、江戸時代を通じて、今山八幡宮と太神宮での神事能は、1年交代で催されるようになります。元禄4年(1691)、前年に起こった逃散一揆が原因で転封となる有

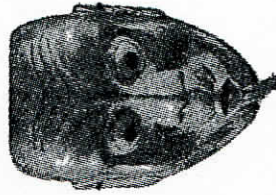


馬家ですが、『稲葉家文書』には、転封は神事能を一年停止したことによるものではなく、当時の噂が記されています。

受け継がれる能道具

高橋家、有馬家の時代に行われるようになった、今山八幡宮と神明宮での神事能は、次の三浦家、牧野家、内藤家にも引き継がれ、1年交代で開催されています。

この神事能で使用する能道具類は『内藤家文書』『祭礼井祈禱代参詣遷宮神事能取扱』に、高橋時代より城下町に引き継がれていることが記されています。このことは『三浦家文書』『日録』からも確認することができます。さらに三浦家が作らせた道具類についても、延岡に残しておくことが記されています。



この能道具類には能面も含まれ、『内藤家文書』『御能道具改帳』では、牧野家は入封以前から伝わる能面55面の他、追加した「邯鄲男」「うそ吹」の2面を、内藤家に引き継いでいることが記されています。

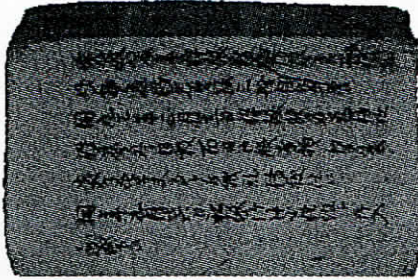
【展示文献資料】

- | | |
|--------------|--------------------|
| 4. 内藤記念館所蔵 | 有馬家中延岡城下屋敷付絵図(複製) |
| 5. 明治大学博物館所蔵 | 諸役所年中行事 町方・寺社方・宗門方 |
| 6. 明治大学博物館所蔵 | 祭礼並祈禱代参詣遷宮神事能取扱 |
| 7. 明治大学博物館所蔵 | 日向延岡御城井町在所々覚書 |
| 8. 明治大学博物館所蔵 | 御能道具改帳 |

延岡藩の能役者

内藤家入封以前の神事能の能役者達については不明な点も多いが、『三浦家文書』『日録』や『九津見家文書』によると、三浦家の時代には、町人や家臣達によって演じられていることが窺えます。こうした演能形態は、内藤家入封後も引き継がれており、毎年の神事能の曲目と役者目を確認することのできる『内藤家文書』『岩城・延岡覚帳』では、内藤家入封以前より神事能を担ってきた役者達を確認することができます。

『内藤家文書』『古由緒書』『新由緒書』には、神事能においてシテ方を務めることの多い荒木家は、喜多流宗家に師事していること、内藤家によって招かれ、ワキ方を務めている姫田家は、脇宝生流宗家に師事していること等が記されています。

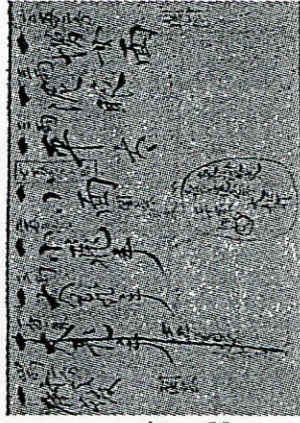


【展示文献資料】

- 9. 明治大学博物館所蔵 岩城・延岡覚帳 (マイクロ複写)
- 10. 明治大学博物館所蔵 新由緒書
- 11. 明治大学博物館所蔵 新由緒書

内藤家旧蔵の能面

明治大学博物館が所蔵する『内藤家文書』『御能装束買料帳』『面・扇・鬘帯・腰帶・紐露・小道具』には、内藤家が所蔵していた能面についての記載があります。しかし、これらの台帳に記されている能面と、現在、内藤記念館が所蔵する能面とは一致せず、これらの能面がどのような伝来を経てきたかについては大きな問題となっています。この問題について、故宮永恒一氏(大分県中津市)が所蔵する能面が、『内藤家文書』にみえる能面の一部であることが確認され、現在、内藤記念館が所蔵する能面以外にも、内藤家が能面を所蔵していたことが改めて確認され、内藤記念館が所蔵する能面が、歴代藩主に引き継がれてきた、延岡伝来の能面の可能性が高くなりました。



【展示文献資料】

- 12. 明治大学博物館所蔵 御能装束買料帳
- 13. 明治大学博物館所蔵 面・扇・鬘帯・腰帶・紐露・小道具
- 14. 明治大学博物館所蔵 能楽詩歌等書類 仮面譜